

近代文学の中の南京事件 榛葉英治『城壁』の誕生と忘却

和田敦彦（早稲田大学）

1 基本情報

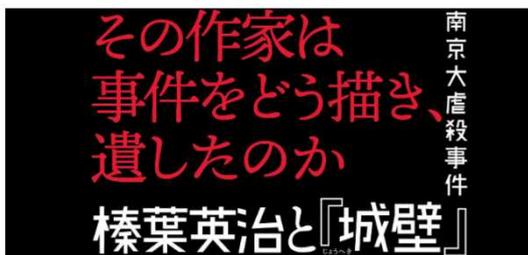
1・1 『城壁』初版、復刊版



南京大虐殺事件を描いた小説。『文芸』（1964年8月号）に掲載、同年11月に河出書房新社より刊行。2020年6月に文学通信より復刊。

その作家は事件をどう描き、遺したのか—榛葉英治（しんばえいじ）と南京大虐殺事件『城壁』●『城壁』刊行特設サイト

[ツイート](#) [いいね!](#) [tumblr](#) [me2](#)



コーナートップへ

『城壁』は、南京大虐殺事件を複数の視点から描き出したばかりではなく、それをいかに歴史として残していくかを問うた最初の小説として、記憶されなくてはならない——（和田敦彦）。

復刊解説については文学通信ホームページ上で公開

<https://bungaku-report.com/joheki.html>

1・2 榛葉英治略年譜

1912年静岡県掛川に生まれる。1925年に掛川中学校に入学、1931年に早稲田大学第二高等学院に入学、上京して雑司ヶ谷で寮生となる。1933年に早稲田大学文学部英文科に進学。1935年、英文科の同級生らと同人誌『人間』を創刊。1936年に早稲田大学英文科を卒業、大連にわたる。同年、関東軍の英語通訳として大連憲兵隊に配属。1939年、兵役、同年大連に帰還。1939年、満州国の外交部、調査司二科に配属され新京へ。1942年、小野寺和久里と結婚、進化街に住む。『満州公論』に評論を執筆。1944年、中国青年の動向調査のため、中国出張、北京、南京、徐州を経て天津へ。1945年、招集され、中部満州へ。敗戦、ソ連軍の捕虜となり、収容所に入るが脱走、進化街に戻る。1946年、ソ連軍が撤退、中共軍の管理下におかれる。さらに中共軍が撤退、国民党軍が北上。7月には日本への引揚げが始まり、出身の掛川に引き揚げ、同年妻の叔父の家に移り住む。

1947年、進駐軍キャンプのPX勤務、終戦連絡事務局の臨時嘱託などをしながら小説の執筆を行う。1948年『文芸』に「渦」掲載され、仕事を辞めて創作に専念。1958年、「赤い雪」で直木賞受賞。1999年に死去、86歳。

1・3 主要作品

年月	タイトル	出版社
195106	蔵王・蘇える女	東京文庫
195606	渦 渦・淵・流れ	近代生活社
195802	赤い雪	和同出版社
195811	誘惑者	光文社
195811	乾いた湖	和同出版社
196311	史疑・徳川家康	雄山閣
196411	城壁	河出書房
196503	倦怠の花	冬樹社
196511	四季の釣り	真珠書院
196605	溪流・川と海の釣り	金園社
196709	青春の伝記島崎藤村	鶴書房
196809	悲愁の川	毎日新聞社
197011	アコひとりパリへ	偕成社
197099	春の陽炎	春陽堂書店
197106	釣魚礼賛	東京書房社
197108	極限からの脱出	読売新聞社

年月	タイトル	出版社
197199	夜と昼の顔	春陽堂書店
197106	英雄たちの顔	月刊ペン
197107	裸の衣装	桃園書房
197406	大いなる落日	時事通信社
197607	釣魚礼賛	日本経済新聞社
197601	夕日に立つ	日本経済新聞社
197810	灰色地帯	日本経済新聞社
197902	炎の女 北条政子	静岡新聞社
198007	続釣魚礼賛	日本経済新聞社
198112	ソ連強制収容所	評伝社
198211	満州国崩壊の日上	評伝社
198212	満州国崩壊の目下	評伝社
198503	大隈重信	新潮社
199002	冬の道	河出書房新社
199207	女院徳子の恋	日本経済新聞社
199310	八十年現身の記	新潮社

2 『榛葉英治日記』について

2・1 日記の所蔵

『榛葉英治日記』34点は早稲田大学中央図書館が2017年に古書店から購入した。各冊に記されている時期については表の通りとなっている。日記は毎年番号を付して作成されており、このうち1958年、76年にあたる2冊を欠く。



2・2 日記の記載内容

日記巻号	期間
1	1946年9月15日～1948年6月26日
2	1948年3月7日～1949年5月1日
3	1949年5月1日～12月31日
4	1950年1月1日～12月25日
5	1951年1月1日～12月25日
6	1952年2月27日～12月29日
7	1953年1月1日～12月31日
8	1954年1月1日～10月28日
8s	1954年10月28日～12月30日
9	1955年1月1日～12月31日
10	1956年1月1日～1957年12月26日
11	欠
12	1959年1月1日～1961年12月1日
13	1962年1月1日～1964年12月9日
14	1965年1月5日～1969年11月25日
14s	1969年7月6日～1970年1月5日
15	1970年1月19日～8月25日
16	1970年8月27日～1971年7月31日

日記巻号	期間
17	1971年8月11日～1972年6月5日
18	1972年6月5日～1973年7月21日
19	1973年7月25日～1975年4月13日
20	欠
21	1977年7月8日～1978年4月7日
22	1978年4月10日～1979年5月30日
23	1979年6月2日～1980年12月26日
24	1981年1月1日～1982年9月20日
25	1982年10月1日～1984年12月25日
26	1984年12月27日～1987年5月29日
27	1987年6月1日～1988年12月27日
28	1989年1月1日～1991年8月7日
29	1991年8月6日～1993年6月29日
30	1993年7月5日～1995年11月23日
31	1996年1月1日～1998年8月15日
ノート1	雪の道/妻入院中の日記/病床日記付録
ノート2	1975年12月11日～1976年1月4日/和久里病床記1
ノート3	1978年1月5日～1979年6月18日/和久里病床記2

2・3 日記に関する調査

リテラシー史研究会では、活動の一環として約10名の調査グループを構成し、2017年からこの資料の翻刻、研究を行い、成果報告を行ってきた。2021年に日記全体の翻刻データの作成を完了。

- ・シンポジウム開催（日本近代文学会、2020年11月28日）
 - 「研究リソースの可能性を拓く 『榛葉英治日記』調査から」
 - 「中間小説」作家の理想と現実
 - 榛葉英治日記からみる文学ジャンル変動の力学（田中祐介）
 - 榛葉英治『城壁』と引揚げ体験（和田敦彦）
 - 榛葉英治「乾いた湖」の映画化と原作 映画と文学の生存戦略（中野綾子）
 - 「釣り」と文学 榛葉英治『釣魚礼賛』を起点として（河内聡子）
- ・出版
 - 『城壁』（2020年、文学通信）
 - 『ある直木賞作家の軌跡』（仮題、刊行予定）

3 『城壁』の執筆背景、刊行形態

3・1 『城壁』について先行研究

笠原十九司「日本の文学作品に見る南京虐殺の記憶」（都留文科大学比較文化学科編『記憶の比較文化論』柏書房、2003年2月）

陳童君「南京虐殺事件の戦後日本文学表現史」（『中国研究月報』2018年12月）

拙論「榛葉英治の難民文学」（榛葉英治『城壁』文学通信、2020年6月）

3・2 刊行形態の変化

218枚の中編小説→600枚の長編→300枚に削って『文芸』→600枚の形で刊行
異同の調査→主に南京安全区国際委員会の側から描いた部分を加筆

3・3 『城壁』に関する日記記述

『日記』1955年8月12日

家でごろごろし、池袋へ出て、「アウシュウィッツの女囚」を観る。説明不十分で、あまり感動はうけなかった。ただ、ナチの惨虐にはいまさらのように想いを覚えた。戦争というもの。また起るかもしれない。人間の中の悪魔。満洲のことを小説にする気持ちがうごいた。

『日記』1962年5月22日

二十日の日曜には、満洲国外交部時代の友人新田君にきてもらい、話を聞いた。南京事件について二人で議論をした。

『日記』1962年5月29日

昨日、中央公論社へゆき、岩州氏に「倦怠の日々」の原稿を預けてきた。持込みで、ものになる期待はたいしててもてそうもない。そのときに、「南京事件」の仕事の話をし、一応、することになったが。

『日記』1963年6月21日

今までに、「南京の残虐」の仕事に没頭した。妻の従兄元海軍士官岩淵氏の紹介で、元南京で参謀だった人から、別の元参謀に紹介してもらった。その仲介者から、中公へ文句がたって、取止めとなった。作品は 80 枚ほど殆ど完成していた。日本の底流にある危険な勢力を知った。諦めるよりほかにはない。つまり、日本には言論の自由はないのだ。

『日記』 1963 年 6 月 25 日

「南京」の原稿が、ムダになり、二、三日、気落ちした。けれども、妻のいうとおり、すぎたことは仕様がなない。

『日記』 1963 年 10 月 13 日

10 日に「城壁」(218 枚)を書き上げた。収入ほとんどなし。この原稿も発表の当なしだ。

『日記』 1963 年 10 月 21 日

「城壁」を河出の「文芸」に預けてきた

『日記』 1964 年 1 月 30 日

旧臘より、「城壁」に没頭しているので、日記もつけなかった。家を売りに出している。権利書を預けてそれで三十万借り、その金で生活している。いまは、アパートに住むのも仕方なしと思っている。(中略)「城壁」は 600 枚になるだろう。一枚 2 千円としたら 120 万の原稿料だが、これは雑誌に連載するところもなかった。そんなへたな商売をし、生活を犠牲にしながら、この長編に熱中している。人からは笑われるだろう。自分としてはどうしようもない。これを完成させなければ、つぎの仕事をする気持ちになれない。(中略)つまり、この「城壁」にすべてをかけている。こんな自分はいったい正しいのか。それとも誤っているのか。(中略)とはいえ、あと百枚ぐらいだから仕上げることだ。

『日記』 1964 年 5 月 16 日

今月五月十六日に「城壁」602 枚を完成した。この長編の仕事が終ったので、今後は、再びジャーナリズムの上で、さかんな仕事をしてゆきたい。

『日記』 1964 年 6 月 22 日

帰宅すると、河出書房よりの連絡で「城壁」を三百枚にして「文芸」にのせるとのこと。20 日に河出へゆき、原稿をもって帰る。(中略)22 日、月曜に、河出に残りの 160 枚の原稿をとどける。

『日記』 1964 年 7 月 7 日

今日、「文芸」の八月号が出た。「城壁」300 枚がのせられた。こんなうれしいことはない。自分だけではなく、家の者たちと、ほっとした思いだ。それにしても、文芸編集長の竹田博氏やその他のスタッフの好意に感謝しなければならぬ。あとは批評だが、これはこれからのこと。とにかく、何年かかかった労作がやっと陽の目をみた。

『日記』 1964 年 8 月 31 日

「城壁」完成。むし暑い日だ。昼に焼酎を一合飲む。

『日記』 1964 年 11 月 5 日

「城壁」は六千部、印税 8 分、定価 430 としまった。どれだけ伸びるか?この九月から、酒びたりであった。丹沢にいたときの健康な自分になつかしい。この頃は、体の調子がわるく、仕事をする気力が起らない。仕事の依頼もない。心では「城壁」の反響を待っている。

『日記』 1965 年 12 月 31 日

「城壁」「倦怠の花」を出版したあと釣りの随筆集に心がかまけたために、この一年間のあとがこのような結末に至った。私小説を棄てる気持ちになり、苦しまぎれに時代小説を書くために、資料を読んでいる。「城壁」は小説新潮賞が最後の二作でせり合ったらしく、落選した。

4 執筆のもととなった資料の扱い

4・1 もととなった資料

『外国人の見た日本軍の暴行』

What war means : the Japanese terror in China : a documentary record (compiled and edited by H. J. Timperley., London : Victor Gollancz, 1938) をもとに戦時中に作成されたその邦訳文書。

南京安全区（難民区）国際委員会の人々による報告、日記、書簡を含む。第一章は当時金陵大学歴史学教授で南京安全区国際委員会の中心メンバーであったマイナー・ベイツ（Miner S. Bate）の書簡と、YMCA 南京支部長の米国人宣教師ジョージ・フィッチ（George A. Fitch）の報告文でできている。第二章はフィッチの日記、第三章はベイツの日記、第四章でフィッチの書簡が用いられている。

→『マンチェスター・ガーディアン』誌の中国特派員 H・J・ティンパーリーが 1938 年にロンドン、ニューヨークで刊行、フランス語版も。

→1938 年に中国語で翻訳、郭沫若の序文を付して刊行され、さらには中国語から日本語への重訳した版もいくつか作成された。

* 洞富雄編『日中戦争南京大残虐事件資料集 二 英文資料編』（青木書店、一八八五年十一月）、南京事件調査研究会『南京事件資料集 一 アメリカ関係資料編』（青木書店、一九九二年一〇月）に収録。

日本語版には鹿地亘と青山和男の序文の付された版、そして出版事項などの記載がない版で『外国人の見た日本軍の暴行』があり、洞富雄はこの版について「おそらく当時、[日本の] 軍部で訳刊し、中枢部のものにかぎり少数配布した、極秘の出版物であったと思われる」とする。

満州国外交部で榛葉は調査二科（欧米情報担当）に属していた。二科の主席事務官が榛葉を誘った山本永清で、山本は 1942 年に新京（現在の長春）から南京大使館へと転出。1944 年に、榛葉は中国青年の意識調査の目的で、一ヶ月の中国出張を命じられ、北京や南京を回る事となる。南京で、山本永清から内々に南京事件についての資料を提供された榛葉は、それを実家の掛川に郵送。（『八十年現身の記』、『満州国崩壊の日』）

杉山平助『支那と支那人と日本』（1938 年、改造社）。

← 鶴見俊輔他『日本の百年 3 果てしなき戦線』（1962 年、筑摩書房）。

今井正剛「南京城内の大量殺人」（『文藝春秋』1956 年 12 月）。

この作品は、その記録の部分は以上の資料を基にしているが、これは純然たる小説であり、構成も、主要人物も、すべて作者の創作であることを付記しておく。（『城壁』初版「あとがき」）

4・2 「記録」部分の書き替え

榛葉英治のもととした『外国人の見た日本軍の暴行』

→『復刻版 外国人の見た日本軍の暴行』（龍溪書舎、1972 年）

日記や事件報告などの「記録の部分」について 7 ヶ所大きく変更が見られる。

『城壁』	原資料（龍溪書舎版）
〔事件報告引用部分 本文133-4頁〕第八十六件（十二月十八日）夜、日本軍下士官の指揮する一隊は、外国人委員を含む金陵女子文理学院収容所の職員を強迫して、大門の入口に、約一時間とどめた。六名の日本兵は収容所から婦女六名を拉致し、六人はまだ還らない。	第八十六件 十二月十七日 日本兵は陸軍大学から南京青年会総幹事某君家の娘三人を虜にした。彼女達はもともと陰陽宮七号に住んでゐたが、安全といふ見地から陸軍大学に移つてきたばかりであつた。日本兵は彼女達を国府路に拉致して汚辱を加へ夜半釈放した。

5 日本文学の中の南京事件

石川達三『生きてゐる兵隊』

1938年1月に南京で取材→『中央公論』1938年1月号→発禁処分、起訴、有罪
戦後、伏字復元版刊行、研究も活発になされる。

堀田善衛『時間』（新潮社、1955年4月）

中国人の陳英諦の日記という形。被害者側からの視点で、想起しがたい出来事へのモノローグ形式で想起しようと語る。物語にしがたい出来事を物語る手法。

榛葉英治『城壁』

- ・視点の重層性

『城壁』では、南京安全区国際委員会と日本の将兵の側、双方の視点を交差させつつ、南京事件の経緯をうかびあがらせていく。

- ・南京事件を記録する行為の前景化

この南京事件を言葉にする新聞記者や評論家を、あるいは日記や書簡、報告書として書き付ける行為を描いた小説でもある。『城壁』では、ラーベに「人類共通の問題として、のちの時代につたえたい」と語らせ、江藤少尉に向けてミルズ神父に「あなたが南京で経験したことを一生、忘れることができないでしょう」と語らせる。あるいは「この南京占領は、歴史にどう書かれるだろう？ここで日本軍隊が何をやったかということ、国民も、後世の人にも知らずにすぎるだろうか」と記者に語らせ、問題を投げかける。

6 引揚げ体験との結びつき

6・1 榛葉英治の引揚げ体験と作品

引揚げ体験についての先行研究

川村湊『異郷の昭和文学』（岩波書店、1990年10月）

朴裕河『引揚げ文学論序説』（人文書院、2016年11月）

成田龍一『「戦争経験」の戦後史』（岩波書店、2010年2月）

→榛葉英治についての研究がなされていない

榛葉英治における引揚げ小説三部作

『赤い雪』（和同出版社、1958年）

『極限からの脱出』（読売新聞社、1971年8月）

『満州国崩壊の日』（上、下、評伝社、1982年11月、12月）

*その他、「鉄条網の中」（『文学者』1949年2月）、『八十年現身の記』（新潮社、1993年10月）

榛葉家の引揚げルート

1946年7月に長春（新京）を発ち、鉄道で1日半がかりで瀋陽（奉天）、4日がかりで錦西の営舎へ、20日間の後、鉄道で胡芦島港へ、そこから日本へ出港。



三部作における引揚げ表象の特性→引揚げの道程自体はほとんど描かれない

『赤い雪』 道程そのものが描かれない

『極限からの脱出』 道程にさかれているのは全体の1割

『満州国崩壊の日』 10数頁（全600頁）

長春で収容所から自宅に戻るまで、そして進駐した軍隊のもとでおびえる生活体験を描くことにその関心は向けられている→南京事件を描くという行為と連続

6・2 『城壁』と『夕日に立つ』の相似性

榛葉英治『夕日に立つ』（日本経済新聞社、1976年1月）

高碓達之助の伝記小説

←高碓達之助『満州の終焉』（実業之日本社、1953年7月）

渋川哲三『高碓達之助伝』（ダイヤモンド社、1966年）

『夕日に立つ』は日本人難民が逃げ込んだ新京の町において、難民や住民と占領軍、さらにはその間にたって交渉する交渉団の関係を描いており、南京城内で日本軍と交渉をあたる南京安全区国際委員会と似通った形の構造で描かれる

満州時代や引揚げ体験にこだわり、書き続けられた榛葉英治の作品群と、南京事件を描く『城壁』とは構造上似通っている。両者は、南京での占領者としての記憶と、長春での被占

領者としての記憶とが、つまり加害と被害の記憶とが重ね合わせられることによって生まれている。

しかし、長春と南京を「相似形」と見なすことの危うさがそこにはある。

6・3 抑留者への関心 戦争被害者としての意識の強まり

1977年に抑留記『朔北の道草』を満州時代の知人、五味正夫（元憲兵准尉）から送られる。五味や関東軍の元参謀草地貞吾（朔北会会長）に聞き取りを行う。（「あとがき」（『ソ連強制収容所』評伝社、1981年12月）

*『朔北の道草 ソ連長期抑留の記録』（朔北会、1977年2月）

『日記』1977年7月1日

郷友連盟に草地元参謀を訪う。「ソ連強制収容所」資料取材のこと、承諾さる。

『日記』1977年7月4日

草地氏に「夕日に立つ」送る。

榛葉英治『ソ連強制収容所』評伝社、1981年12月

昭和五十二年の冬、私の古い友人で長野県の岡谷市に住む五味正夫氏が、一冊の厚い本を送ってくれた。「朔北の道草」と題する昭和五十二年出版のこの本は、戦犯として十年以上をソ連に抑留された人たちの手記を集めたものである。私はこの本を読んで感動した。（中略）

この「朔北の道草」の編集・発行者は朔北会で、その代表者は草地貞吾氏である。私は元関東軍の参謀で大佐だった草地氏をその事務所に訪ねて、自分の考えと希望を述べたところ、氏は私の考えに賛成され、私が「朔北の道草」の手記を基にして「ソ連強制収容所」を本にすることを許された。

抑留記や体験者の聞き取りを通して、榛葉にとっての戦後の時間は抑留されていたかもしれない、抑留され続けていたらという恐怖と怒りの記憶となっていく＝〈仮想抑留者〉
→加害と被害の隣接した記憶から、被害者としての恐怖と怒りへ

『ソ連強制収容所』

あのときに脱走しなかったら、私は死んでいたと思う。今度、この本を書くに当って、当時、シベリアに送られた人たちの多くの手記を読んで、いっそうこの感を強くした。あのときにシベリアへ送られていたら、体力がなくて労働にも馴れない私は、極寒の苛酷な状況の中で死んでいたに違いない。

『崩壊国崩壊の日 下』

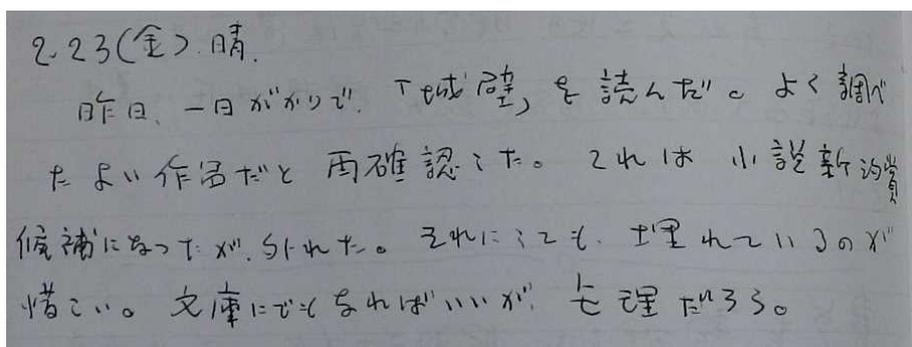
もしあのときに、自分が捕虜収容所から脱出しないで、シベリアに送られていたら、生活の事情は違うにしても、自分の息子も残留孤児になっていたかもしれない。

『日記』1981年12月5日

あのときに脱出していなければ、自分は間違いなくシベリヤで死んでいた。現在までの自分はないわけだ。

特に一九七〇年代以降、抑留者やその記録に対する関心を高めていくにつれ戦争被害者としての感情が、戦争の加害者として記憶を圧倒していくことがうかがえる。戦争の加害者、占領者としての側の意識が満州の記憶から後景にしりぞいていく。

7 『城壁』忘却の諸要因



『日記』一九四六年二月二三日

昨日、一日がかりで「城壁」を読んだ。よく調べたよい作品だと再確認した。これは小説新潮賞候補になったが外れた。それにしても埋れているのが惜しい。文庫にでもなればいいが無理だろう。

伝記には「河出書房から出版された『城壁』は、どういう理由か絶版になった」と記している。同時代の評にはむしろ南京事件自体を否定するような評はなく、『城壁』は第十二回小説新潮賞の候補作に選ばれる。

「城壁」は力作である。その点に私は感心したが、男性委員には戦争の体験を持つ方たちが多く、この作品を否定する理由もはっきりしているので成程と思って棄権した。(円地文子「小説新潮賞選後評」(『小説新潮』一九四六年二月)。

・南京事件への否定と忘却

歴史学領域では洞富雄らが精力的に史実を明かしていく一方で、五五年体制のもと、教科書攻撃によって南京事件の記述は六〇年代を通してなされなくなる。

←笠原十九司「南京虐殺と記憶の歴史学」

引揚げ文学との共通性

引揚げ体験は戦後、膨大な手記や回想記を生み出してきたが、加害者としての日本を含む「植民者たちの物語」であったがゆえに、戦後の論壇や学界、されには文壇や文学研究領域でも見過ごされ、忘却されてきた。

←朴裕河『引揚げ文学論序説』

文学研究の制度性

日本文学研究では、大衆作家や中間小説作家の研究はきわめて少ない。

近代文学の研究は、描かれるもととなった出来事や事件自体よりも、小説が作り出す世界のほうに関心や評価を向けがち。

→伝記小説や歴史小説、ルポルタージュといった領域の研究が弱い。

戦争の記憶、記録が、どのように広がり、継承されていくのかを問う共通の土台に立った思考、研究が必要。

報告での言及資料（『日記』以外）

笠原十九司「日本の文学作品に見る南京虐殺の記憶」（都留文科大学比較文化学科編『記憶の比較文化論』柏書房、2003年2月）

笠原十九司「南京虐殺と記憶の歴史学」（『現代歴史学と南京事件』柏書房、2006年3月）

川村湊『異郷の昭和文学』（岩波書店、1990年10月）

朔北会『朔北の道草 ソ連長期抑留の記録』（朔北会、1977年2月）

渋川哲三『高碕達之助伝』（ダイヤモンド社、1966年）

榛葉英治「鉄条網の中」（『文学者』1949年2月）

榛葉英治『赤い雪』（和同出版社、1958年）

榛葉英治『城壁』（河出書房新社、1964年6月）

榛葉英治「城壁」（『文芸』1964年8月）

榛葉英治『極限からの脱出』（読売新聞社、1971年8月）

榛葉英治『夕日に立つ』（日本経済新聞社、1976年1月）

榛葉英治『ソ連強制収容所』評伝社、1981年12月）

榛葉英治『満州国崩壊の日』（上、下、評伝社、1982年11月、12月）

榛葉英治「編集者への手紙」（『毎日新聞』（朝刊、1982年8月3日）

榛葉英治『八十年現身の記』（新潮社、1993年10月）

榛葉英治「編集者への手紙」（『毎日新聞』（朝刊、1983年12月4日）

榛葉英治『城壁』（文学通信、2020年6月）

高碕達之助『満州の終焉』（実業之日本社、1953年7月）

高碕達之助集刊行委員会『高碕達之助集 上』（東洋製罐、1965年2月）

陳童君「南京虐殺事件の戦後日本文学表現史」（『中国研究月報』2018年12月）

Timperley, H. J. *What War Means : the Japanese terror in China : a documentary record*, London : Victor Gollancz, 1938.

ティン・バーリィ『外国人の見た日本軍の暴行』（龍溪書舎、1972年2月）

ティンバーリィ『外国人の見た日本軍の暴行』（評伝社、1982年11月）

成田龍一『「戦争経験」の戦後史』（岩波書店、2010年2月）

朴裕河『引揚げ文学論序説』（人文書院、2016年11月）

堀田善衛『時間』（新潮社、1955年4月）

和田敦彦「榛葉英治の難民文学」（榛葉英治『城壁』文学通信、2020年6月）